



若いお母さん達へ

はるにれの会 橋本 都

皆さん、初めまして。

我が家の息子H（小学四年）は、きょうも卓球の試合があると、朝早く元気に飛び出していきました。お弁当はおにぎりの他に、Hの言によると力がもりもり出てきそうな野菜炒め、コロッケ、ウイソナ等、お気に入りのメニューです。先日、Hのラグビーの試合をみたのですが、泥まみれになって走り、ぶつかっているのを見ると、随分遅くなったものだと思います。

今、この十年間を振り返ってみますと、Hは、こんなに丈夫だったのでありません。アレルギー体質というのでしようか。扁桃腺を腫らしやすくて、風邪をひくと高熱が続ぎ中耳炎を何度も繰り返し、アトピー性湿疹で掻き傷だらけになったこともありました。でもやっとこ

の頃では、お医者様には殆んどかからなくなりました。

Hの場合は、幸い友達と外で遊ぶことが好きでしたし、その中で自然に強くなっていったように思います。

勿論、友達と仲良く遊べるようにと願いつつも、遊べば遊んだで友人関係を心配したり、他家に迷惑をかけてお詫びに行ったりと、親としては困ったこともありました。

それから、体を動かすことが好きで、自分から望んで水泳に取り組みましたが、いくら好きなスポーツでも続ける間には気ががぐらついたり、具合が悪くて中断したこともあります。

ですから、丈夫になったということも、しばらく経って子どもをみた時、やっと確かめられる程の歩みであったと思われるのです。

体の面でもこうなるのですから、ましてや心の面は大人のように、すぐには育っていかないのが当然でしょう。

Hが五才九ヶ月の時のことです。

☆二月末から三月上旬のこと。毎晩、いやに甘える。朝

もそうである。一つ一つの行動が後ろ向きである。「さあ着がえて。」「いやだいやだ。ママ着せて」といった具合で、二階までいくのも、おんぶ、抱っこといった有様である。祖父母は呆れて「こんなんでこまどり（年長組）になれない。」「どうしたんだらうね。もうおにいさんでしょう」と言うと、ますます暴れて泣く。

毎日きまって寝る時とか朝起きた時とか、親も忙しい時にぐずりだすのですから、いらいらして、つい大声を出したりしてしまいます。それが二月の末にHが通っている保育園のPTAに出席して、なんとなくそんなHの行動の理由がわかってきました。Hの組は春に最年長の組に進級するので、年下の子ども達の範となるよう、何でもよくがんばっているのだそうです。Hも立派にやっいて、泣かないし、友達ともよく遊ぶ「よい子」だということです。昼寝から起きると、五分以内に布団をたたみ、机やイスを用意することもやっつてのけ、かえって年長組より立派だと先生はおっしゃるのです。

今までならよく「こまどりにいじめられた」と言つて、その年長組になる日を待ち望んでいたはずなのに、そういう「おにいさんになりたい自分」と「おにいさんになるためにやらされている自分」そして「そうでないありのままの自分」とのぶつかり合いが、甘えたり暴れたりという行動になって現われたのではないかと思ひます。知らず知らず、我々まわりの大人にも「おにいさんになってしつかり」との思いが強くと、それが余計Hを圧迫したのでしょうか。「もうすぐおにいさんになるね」と言うところにこりとするものの、同時に不安な自分もあるわけです。

このようなことは、子どもの生活の節目によくみられます。新しい環境に飛び込んだ時や、弟や妹が生まれた時もそうでしょう。Hは一人っ子ですから、そのような経験がなかったのですが、小学校に入る少し前に従妹が生まれました。従妹のSがまだお人形のような赤ちゃんのうちには、とてもよく遊んでくれました。イナイイナイパーをしたり、隠れんぼをしたり、それは精一杯のお兄

さんぶりであったと思います。ところがSが帰ると二、三日はまるで赤ちゃんのように母に甘えてくるのです。Sが大きくなってHの使うものを何でも「かちて(貸して)」と取り、真似をすると、いやいやこらえて貸すのですが、後で「S嫌いだ」と叫んで機嫌が悪くなったものでした。

さて、先程の例で、甘えたり暴れたりしながらも、Hの心の中にどのような思いがあったのか、記録からみてみましょう。

☆雪が降る。夕暮れ、ちょっと外出しようとした時、「ちよっと待って」と言つて庭にまわり、雪穴を掘つて、中に紙切れのようなものを埋め、にこにこ鼻歌を歌いながら戻ってきた。

その時理めたものが何であるかは、聞きませんでした。Hは紙切れに絵やら字やらを書くのが好きで、電話のメモ用に切っておいた紙はすぐなくなる程、いっぱい書いては捨てているので、とりたてて気にもとめませんでした。

八戸は北国ですが、そんなに雪は降りません。だから、こうして、たまに降り積ると、私達を幻想の世界へと誘ってくれます。月明りに輝く雪の結晶は、ほんとうにきれいです。

そういうえば、長い長い冬ですから、時々「はやく春が来ればいいね」などと、Hに話をしたことがあります。寒い地方の人間にとっては春を本当に待ち望み、それが、凍てつくような毎日を過ごす支えともなっているのです。それから、冬眠する蛙や熊の話もしていました。

きつと埋めることのおもしろさより、Hにとつても、やがて春の来る日を待っていたのではないかと思いません。自分だけの大切な物がいつか確実に大きくふくらんで出てくるのです。だから、ほんの一、二分のことなのにあんなにも満足気な表情であったのではないかと思えます。

この頃から、未来に関する遊びや生活の場面が多くなります。朝の目覚し時計やストーブのタイマーセットを

喜んでやるのは、やはり、自分で確実に未来が把握できるからではないかと思えます。そして仕事を完了するとやっと安心して眠るのです。タイマーのセットは今までは母がやっていたとても大切な仕事ですから、それができるといふことは、大きくなってしっかりと自分自身で認めているのでしよう。

それから、新聞の明日の番組という欄をみつけ、それが翌朝の自分のいつも見ている番組であることがわかると、とても喜びます。毎朝、新聞をとってくると、その箇所を手で押さえて誰にもみせられないようにするので、これも今までよくわからなかったのに、自分だけが確実に明日のことがわかってそれがうれしいのではないかと思えます。

いよいよ四月。Hは晴れてこまどり組になりました。「僕は大きくなったら学者になるっていったんだよ。」と自分の未来を積極的に語ります。ついこの間まで、ウルトラマンだったり、質問されると考えた拳句、わからな

いだったりしたのですが、本当に生き生きと言うので

す。そして、おもしろいことに「僕が赤ちゃんの時、かわかった？」と聞いてわざと赤ん坊の真似をして甘えてみせるのです。年長組になって、こんなにも大きくなった自分がうれしいのでしょうか。とにかく現実として大きいと認められた「自分」なのです。年長組になるために課題を果たさねばならない状況から、ありのままの自分に戻れ、それが大きくなったことと同等なのです。

それから、しばらくはHは夕方まで泥んこになって友達と遊ぶようになりました。「僕は大將だ！」と叫んでいるのを見ると、二月頃の泣きわめいたことが嘘みたいに見えたものでした。そして、保育園でも小さい子とふれあって、寝る時にかわいがったことを話すことが多くなっていったのです。

こうしてHの生活をみていくと、表面にみえた一つの行動だけで子どもの心を決めつけてはならないなあと思省させられます。どうしても、子どもの中に「○○がない」とみてしまうと、すぐ短絡的に「○○にするには」と考えて躍起になるものです。子どもの中に育とうとす

る芽があることを信じて、子どもを受け入れていかなければと思います。

さて、子どもと共に過ごす毎日は悩んだり困ったりすることが、つきものですが、とても楽しいものだと思います。折りにふれ、子どもの遊びをみていると、その懸命な様子に引き込まれていきます。

Hの幼児期の遊びをみるとおもしろいことに気がつきます。

☆お祭りや縁日には必ずお面を買ってもらい、かぶって母の所に来て「△△だぞう」と言い、パッととって大笑いする。また違うお面を前後にかぶり、鏡の前に立って、くるっと回ってのぞきこんだり、母のヘアピースをかぶって女の子の仕草をしたりする。

☆絵を描き、その上に白い紙を重ねて、「みてみて」と見せる。「何も書いてないでしょう」と言うとき、イナイナイバーと一人でいつて紙をとり、ケラケラ笑う。また上から見ても下から見ても人になるといった絵を好んで描いたり、折った時と開いた時と違う絵に

なるものをよく作る。

☆手品を好んで家族にみせる。星をつくるのに紙を折って切って、パッと開いて喜ぶ。

こうした「変化」を楽しむ遊びは4才半位からたくさん見うけられるようになりました。Hの個性とも言える程、そのような遊びを楽しんでいるのですが、同時にHの内面にどのようなものが育ってきているのかはよくわかりませんでした。

例えばHはきっと変わる時の不思議な楽しさ、偶然のおもしろさに魅かれていたでしょうし、その変化を母や家族にみせた時、共通の楽しい時を味わうことをうれしく思っていたのではないのでしょうか。普段、忙しさにかまけて、じっくりと子どもと遊ぶことが少ないのですから、母が自分の誘いかけにに応じて驚いたり笑ったりすることはとてもうれしかったのでしょう。

さて、変化した時の喜び、驚きなどが遊びをすすめる原動力になっていたのに、半年位の間に次第に遊び方は変わっていきます。あれほど好きだったお面遊びも、あ

まり熱中せず、何度か使って、鏡の前でポーズをとってそれで終わりとなるのでした。子どもというのは風呂敷や紙や、他の遊具を加えて限りなく工夫できる才能がありますから、ただ飽きたのではないように思われませんでした。

記録からいくつか拾ってみましょう。

☆手品で皆を喜ばせるよりも、どうなっているのか、種トリックを探ろうとしたり、他のやり方はないかと、いろいろにいじってみる。

☆夜、自動車に乗った時のこと。道路際の反射灯のことが気になる。どうして遠くの時は見えないのに近くに來ると光るのかと聞く。反射テープの話をすると、そのことが不思議で、とうとう買ってもらう。テレビのスイッチなどに貼って電気をつけたり消したりして、やがて「本当だ」という。

☆折り紙の作り方の本を見て、一人で折り紙を作る。途中で、折り方がわからないので、横から「こようよ。」と教えようとすると、「言わないで」と言ってお

こる。

☆ハンカチでうさぎをつくる。その作り方を家族に秘密にするが、すっかり自信がつくまで、奥の納戸に閉じこもって誰にもみせない。行くとおこる。

☆アイロンをかけていると台を足で触る。危いので注意すると、どうしてしわしわがとれるのかと不思議そうに見ている。

このように、この頃の遊びは、どのように変化が生み出されるのが、Hにとって大きな意味をもってきたようです。ですから、遊びの形は、探ろうとし、質問し、試みるのです。いろいろな状況を自らの手によって変えていくのが楽しいのです。思い通りできない場合もなんとか獲得するまで懸命です。

一方、あれほど好きで毎日二時間位を費してきた積木やソフトブロックを使う遊びはほとんどしなくなってきました。本当にこんなによく遊ぶものかと思うぐらい次から次へと形づくって遊んでいました。遊具のうちでも、時にはお団子になったり、自動車になったり、価値

を変えやすいものであったはずですが、ほとんどというより、全然と言ってもいい位しなくなってしまったのはどうしてでしょうか。

五才以前にこれらによって遊びに熱中した世界——子どもの遊びの世界は大人から見れば、空想の世界だったのでしよう。そんな子どもの世界でHは生きていたといえるのではないかと思います。それに対し、五才を過ぎからの遊びは、現実の世界に深く切りこんできたものようです。そしてH自身の自分の捉え方も変化していきます。

☆耳にティッシュペーパーをねじってはさみ、食器棚によじのぼって飛ぶ。思わず笑ってしまって、「そんなことして飛べるの？」とつい言ってしまう。すると、平然と「とべないのはわかってるけど、飛べるような感じになるんだ」と言う。

☆寝る時、その日一日あった事を喋ることがあるが、自分から「僕、いいことしたんだ」と言う。また、母に叱られたことを反省して、「僕、悪かったことが悪い」

と言う。

このように、自分というものを客観化してみつめるようになってきているのです。

私のように仕事を持っていきますと、どうしても子どもとふれ合う時間は少なく、毎日の育児も、してやらなければならぬ世話が先に立ちます。そんな時、こうして夜、自分だけの時間をみつけ、子どもの生活を思い出して記してみると、母親として、ゆったりと子どもをみてやらなかったと、いつも省るのです。でも、子どもって本当におもしろいものです。私達もつい三十年程前にはそうであったのに忘れかけている、あの屈託のない笑い、あまりうまくできて叱れなかった悪戯。

そして、子どもの心も体と同様に、だんだんと育っていることに気がつき、感謝するのです。

それでは、子育て真最中の皆さん、お元気で。

